

商品の価値

杉 上 忠 幸

1. はしがき
2. 資本論における価値の説明
3. 本稿の論理の展開次元
4. 簡単な価値形態
5. 簡単な価値形態の過渡的發展形態
6. 貨幣形態
7. むすび

1. はしがき

人間の労働生産物は商品経済では商品形態をとる。商品は人間の労働生産物の最初の發展形態である。社会における商品経済の發展は諸商品の中からごく少数の適当な商品を一般的等価物にする。そして資本主義経済の確立過程で、これらの少数の一般的等価物の中から金が唯一の一般的等価物として社会的に公認され、貨幣に転化する。人間の労働生産物の商品形態から貨幣形態への發展である。貨幣がその機能の發展によって蓄蔵手段として機能する時、貨幣はさらに資本に發展する。こうして、人間の労働生産物は最高の發展形態としての資本に成長する。人間の労働生産物の最高の發展形態である資本は、さらに、資本主義経済の段階的發展によって形態的に変化していく。すなわち、資本は、資本主義経済における産業資本段階では産業資本形態にあるが、金融資本段階では金融資本形態に發展し、現代資本主義或いは現代帝国主義と通称される資本主義経済の發展段階では多国籍企業化された巨大株式会社の資本形態に發展している。現在の資本主義社会の経済は人間の労働生産物のかかる絶えざる形態的發展の産物である巨大株式会社資本の活動に支配されている。我々はかかる経済の下で仕事と生活を繰り返して生きていく。

労働生産物の形態的發展の始点である労働生産物の商品形態において、人間の労働生産物としての商品は始めて商品の価値を自らの特有な性質とするようになる。人間の労働生産物の商品化以後の形態的發展は、様々な形態的發展の次元にある労働生産物がこの商品の価値に対して様々な能動的に働き掛ける事によって推進されていく。すなわち、商品交換の發展によって生まれた貨幣による商品価値の表現、価値尺度及び流通手段として機能する通貨による商品価値の測定と実現、蓄藏手段（支払手段の機能を含む）として機能する貨幣による商品価値の蓄藏、資本による商品価値の増殖、資本主義經濟の様々な發展段階において商品価値の増殖を推進する資本の様々な發展的諸形態、これらは、人間の労働生産物の継起する形態的發展が商品の価値に対して、能動的に様々な働き掛けた一連の軌跡である。

人間社会の商品經濟化そして資本主義化さらに資本主義經濟の段階的發展過程、これらの過程に現われる様々な人間の労働生産物の形態的な發展の中軸を貫徹する商品の価値は、經濟学の理論体系構築の原点をなす概念である。したがって、商品の価値が商品の如何なる性質であるのかと言う問題は、經濟学研究上、きわめて基礎的な問題である。

古典派經濟学のアダム・スミスやデイヴィッド・リカードは「不完全にはあるが、価値および価値の大きさを分析し、そしてこれらの形式のうちに隠されている内容を発見した。労働は価値の源泉であり、商品価値の大きさは、その商品に対象化されている労働の分量によってきめられるということを、かれらは知っていた。ことにリカードは、そこでいう『労働』とは、——略——その商品（任意の一商品——杉上）を生産するために必要な労働（「費やされた労働」labour expended）であるとして、正しい労働価値論の本質を洞見した。（杉本栄一 近代經濟学史 1953年 岩波書店 p. 276.）」

マルクスもまた、資本論において、生産的労働から具体的有用労働を捨象し、抽象的人間労働が商品価値を創造する実体であることを論証する。しかし、抽象的人間労働が商品の価値を創造する実体であることを主張することは、その実体の創造の結果である商品の価値が商品の如何なる性質であるかを明らかにすることではない。彼はまた彼以前の經濟

学がいまだかつて試みなかった⁽²⁾価値形態論を展開し、商品の価値が貨幣によって表現される事を明らかにする。ところが、それは価値形態における二商品の等価値量を前提にする。価値形態論にはそれを前提し得る論拠はないのである。

故杉本栄一教授は経済学における価値形態論の意義を、「近代経済学史」において、次のように指摘する。すなわち、「マルクスの価値形態論は、使用価値と価値という、商品の内部に含まれている本質的内面的な矛盾が、その矛盾の故に、必然的に、二つの商品の間の外部的対立として、すなわち交換価値として現象し、そこに『矛盾がそれにおいて運動する形態を創造する』弁証法的発展の論理を明らかにすることを、その第一の課題とする。——略——価値形態論の第二の課題は、第一の課題と実は別なことではないのであるが、価値形態の完成した姿としての、貨幣形態の謎を解明するにある。(杉本栄一 *ibid.*, pp. 278-279)」かくして、価値形態論は、本来、人間の労働生産物の形態的發展の論理を解明する基礎理論である。

人間の労働生産物が形態的に資本へ発展する必然を明らかにするには、第一に商品の価値の完成された表現機構である貨幣形態が如何にして成立するか、第二に商品の価値は商品特有の如何なる性質であるか、この二つの問題を解明する必要がある。本稿の課題はこれらの問題を解明する事に在る。

2. 資本論における価値の説明

周知のように、マルクスは、「資本論」の「第一部 資本主義的生産の発展 第一篇 商品と貨幣 第一章 商品」の「第一節 商品の二つの要因⁽³⁾」で、商品の二要因としての商品の使用価値と商品の価値について、それらが如何なるものであるかを説明する。

マルクスは、まず、商品の使用価値は物の有用性によって成立する商品の一要因であると理解⁽⁴⁾し、次のように言う。「物の有用性は、この物を使用価値にする。だが、この有用性はなんらあいまいでほんやりしたものであるのではない。それは、商品体の属性によって規定されているので、商品

体なしにはけっして存在しえない。したがって、鉄や小麦やダイヤモンド等のような商品体そのものが、使用価値なのである。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 カール・マルクスフランス語版資本論 1979年 法政大学出版局 p.4.)」マルクスは、一応、商品の使用価値をこのように説明したのち、商品から商品の使用価値を捨象して、商品の価値を説明する。すなわち、「商品の自然的な特性は、それがこの商品に、使用価値を産む有用性を与えるかぎりでのみ、考察されるものなのである。しかし、他方では、自明のことだが、商品が交換されるばあい、商品の使用価値は、捨象されるし、どの交換関係もこの捨象によって特徴づけられている。交換においては、ある使用価値は、それが適当な割合にありさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけの価値がある。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p.6.)」そして、「もしわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、——略——労働生産物の個々の有用的性格と一緒に、そのうちに含まれている労働の有用的性格も、——略——同時に消滅する。したがって、もはや、これらの労働に共通な性格しか残らない。これらの労働はすべて同じ人間労働に、人間労働力の支出に、人間労働力が支出された個々の形態にかかわりなく、還元される。——改行——さて、労働生産物の残留物を考察しよう。それぞれの労働生産物は、——略——同一の昇華物、同じ無差別な労働という原器に変態されて、もはや一つのことしか表さない。すなわち、これらの物体の生産には人間労働力が支出されたということ、そこには人間労働力が積み重ねられているということである。この共通な社会的実体の結晶として、これらの物体は価値と見なされる。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, pp.6-7)」この引用文中の「この共通な社会的実体の結晶として、これらの物質は価値と見なされる」という箇所において、マルクスが「この共通な社会的実体」と言っているのは、この文章のすぐ近くに続く「さて、商品の価値量をどのようにして測定するのか？ それに含まれている『価値を創造する』実体の分量、すなわち労働の分量によってである。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p.7)」という文章によって、商品の「価値を創造する実体」すなわち労働から具体的有用労働を捨象した抽象的人間労働であることが明瞭になる。

マルクスは商品の価値をこのように説明したのち、改めて、空気や自

然るの牧場や処女地は「価値であることなしに使用価値でありうる（江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p. 9）」こと、また自給物は「商品であることなしに有用であり人間労働の生産物でありうる（江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p. 9）」ことを説明する。そしてこの説明に続けて、商品の使用価値が他人のための社会的な使用価値でなければならぬこと、商品が商品の使用価値を一要因としなければ商品の価値をその一要因ともなしえないことを次のように述べる。すなわち、「商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値、社会的な使用価値を生産しなければならない。最後に、どんな物体でも、有用物でなければ価値ではありえない。物体が有用でなければ、その物体が含んでいる労働は無駄に支出されており、したがって、価値を創造しない。（江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p. 10.）」

マルクスは、いま述べたように、商品から商品の使用価値を捨象することによって、商品の価値を説明する。しかしマルクスが商品の価値について説明していることは「ある種類の労働を他の種類の労働から区別するさまざまな具体的形態も、同時に消滅（江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, pp. 6-7）」した人間労働が商品の価値を創造するということ以外の何物でもない。したがってマルクスは、「それぞれの労働生産物は、——略——同一の昇華物、同じ無差別な労働という原器に変態されて、もはや一つのことしか表さない。すなわち、これらの物体の生産には人間労働力が支出されたということ、そこには人間労働が積み重ねられているということである。この共通な社会的実体の結晶として、これらの物体は価値と見なされる。——改行——したがって、商品の交換関係、すなわち交換価値のうちに現われる共通なあるものが、それら商品の価値なのである。そこで、使用価値あるいはなんらかの物品は、人間労働がそのうちに具現されているかぎりでのみ、価値をもつのである。（江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p. 7.）」と述べるのみである。ここでは、労働の具体的形態を捨象した人間労働すなわち抽象的人間労働が商品の価値を創造することを確認しているに過ぎない。

マルクスは、第一節に続く「第二節 商品によって表される労働の二重性格」において、生産的労働の抽象的人間労働が商品の価値を形成し、具体的有用労働が商品の使用価値を生産することを説明する。すなわち、

次の如くである。「どんな労働も一方では、生理学的な意味で人間労働力の支出であり、この同等な人間労働という資格において商品の価値を形成する。他方、どんな労働も、特殊な目的によって規定されるなんらかの生産形態のもとでの、人間労働力の支出であって、この具体的な有用労働という資格において使用価値あるいは有用性を生産する。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p. 16)」

次いでマルクスは、「第三節 価値形態」において、商品の価値がある商品と他の商品との関係において現われるという商品の価値表現の基本的仕組を論理的に発展させて、商品の価値の表現における完成された形態すなわち貨幣形態の必然性を解明する。すなわち、「第三節 価値形態」の冒頭で、マルクスは「ブルジョア経済学がかって試みなかったことを試みるのが、いま問題なのだ。貨幣形態の発生を提供すること、すなわち、商品の価値関係のなかに含まれている価値表現を、最も単純で目立たないスケッチから初めて、万人に一目瞭然なこの貨幣形態にまで発展させることが、問題なのである。それと同時に、貨幣の謎が解決されて消え失せるであろう。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, p. 18)」と述べているのである。

貨幣形態は、このように、商品の価値を、最も完全な状態で、表現しているのであるから、貨幣形態において表現されている商品の価値を観察することによって、生産的労働の抽象的人間労働が創造した商品の価値が商品の如何なる性質であるかが具体的に把握できるはずである。このことについて小幡道昭はその著「価値論の展開 1988年 東京大学出版会」において次のように言う。「商品論における価値概念は『価値形態』の外部において予め与えられている定義ではなく、あくまで『価値形態』の展開を通じて醸成されるべきものであり、また『価値形態』の理論内容もこうした目標に沿ってその理論的精度を高めてゆくべきなのである。(小幡道昭 *ibid.*, pp. 38-39)」しかし、「第三章 価値形態」における「D. 貨幣形態⁽³⁾」では、マルクスの論旨の重点は、商品の価値は貨幣形態で如何に表現されているかを説明することにはなく、むしろ、貨幣形態においては、商品金が貨幣に成長・転化していること、そして貨幣形態における単純な価値形態が価格形態であることを主張することにある。すなわちマルクスは次のようにいうのである。「金は、商品世界の

価値表現においてこういった地位の独占を勝ちとるやいなや、貨幣商品になったのであり、金がおもはや貨幣商品になったその時にはじめて、形態IVが形態IIIから区別される、すなわち、一般的価値形態が貨幣形態に変態する。

たとえばリンネルという一商品の、すでに貨幣として機能している商品たとえば金においての、単純な相対的価値表現が、価格形態になる。したがって、リンネルの価格形態は、

20メートルのリンネル = 2 オンスの金

あるいは、二ポンド・スターリングが金 2 オンスの鑄貨名であれば、

20メートルのリンネル = 2 ポンド・スターリング

になる。(江夏美千穂・上杉聡彦訳 *ibid.*, pp. 44-45)」

こうして、マルクスが 資本論 「第1部第1篇第1章 商品」において説明したことは、一つは商品の価値を創造する実体が人間の生産的労働から具体的有用労働を捨象した抽象的人間労働であること、他の一つは商品の価値表現という一つの論理の表裏両面、すなわち商品の貨幣への転化の論理と貨幣による商品価値の表現の仕組みとを説明することであった。商品価値が貨幣形態において商品に特有な如何なる性質として把握し得るかという問題は明確にされていないのである。

3. 本稿の論理の展開次元

19世紀40年代初めから70年代初めまでのイギリス資本主義社会の発展には次の三つの歴史的特徴があった。すなわち、産業資本相互間で、ヨリ高い利潤率を目指して自由競争を展開する個別産業資本それぞれの資本主義的生産が全体で、イギリス社会の社会的生産を維持していたこと、農民層における両極分解の進展がイギリス社会の階級構成を資本家階級と労働者階級および資本家的土地所有者階級からなる三大階級に純化しつつあったこと、また、国家は夜警国家として機能することが理想とされ、安上がりの政府という理念が実現されていたことがそれらである。当時のイギリス資本主義社会における社会発展の歴史的なこの三つの基本傾向の抽出によって、われわれは、イギリス資本主義社会の当時の歴史的発展における究極の姿を理論的に想定し、この理論的究極の姿を「純

「純粋な資本主義社会」として把握し、この「純粋な資本主義社会」を現実の資本主義経済を分析する基礎理論（経済学体系における原理論）形成の理論モデルとするのである。

現実の資本主義経済を分析するための基礎理論（原理論）の課題の一つは、歴史上存続する一つの社会としての資本主義社会について、その存続の経済的メカニズムを明らかにすることである。具体的には、それは、利潤獲得を目指す産業資本相互の自由競争に織り込まれて展開される産業資本各々の資本主義的生産過程が、総体において、如何にして資本主義社会における社会的生産力を増進させ得るのか、そしてまた、さまざまな生産物の同時的な社会的需給均衡（一般均衡）を可能にする社会的諸資源の適正配分を如何にして為し得るのか、という二つの点を明らかにし、かくして、かかる産業資本の資本主義的生産過程が資本主義社会の社会的生産を担い得ることを、明らかにするものでなければならない。そのためには、資本主義経済における次の諸事実の成立が論証されねばならない。すなわち、資本主義的生産過程では剰余価値が形成されること、特別剰余価値をヨリ多く獲得しようとする産業資本相互間の競争が、社会的労働生産力の上昇をもたらすこと、更に、産業資本相互間のヨリ高い利潤率の実現を目指す競争によって一般の利潤率が傾向的に成立し、社会の総剰余価値が産業資本の各々へ生均利潤として配分されること、かくして資本主義社会における一般均衡が成立し、従って、諸資源の適正配分が可能になること、これらの論証が不可欠である。そして、これらの論証は、言うまでもなく、産業資本の資本主義的生産過程を研究対象としなければならない。

産業資本の資本主義的生産過程は、周知のように、産業資本の姿態変換の運動形式 $G - W \cdots P \cdots W' - G'$ ($W = A + P m$) における生産過程すなわち、 $W \cdots P \cdots W'$ によって表される過程である。言うまでもなく、ここで、 G, G' ($G' = G + \Delta G$) は貨幣形態における資本であり、 A は商品化された労働力、 $P m$ は商品化された生産手段、また、 W, W' ($W' = W + \Delta W$) は生産過程で生産された商品である。したがって、産業資本の資本主義的生産過程の説明は、商品化された人間の労働生産物、商品化された人間の労働能力、人間の労働生産物の形態的發展の所産としての貨幣形態における資本、これらの経済的概念が明らかになっ

ていることが前提である。

かくして、労働生産物の形態的發展の所産である労働生産物の商品形態、貨幣形態、資本形態、これらの経済的概念の基本性格は、産業資本の資本主義的生産過程の説明に先だつて解明されている必要がある。したがって、これらの経済的諸概念の基本性質は、純粋な資本主義社会における、商品の流通過程（商品の売買を基軸とした商品の生産の場から商品の消費の場への商品の移動過程）と資本の流通過程（産業資本の運動形式における資本の流通過程）の次元において、分析されていなければならない。これらの経済的概念の分析に産業資本の資本主義的生産過程の分析を混入してはならないのである。

マルクスは「経済学批判」において、経済学の方法として「抽象的な諸規定が思考の道をへて具体的なものの再生産にみちびかれる（マルクス経済学批判 武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳 1956年 岩波文庫 p.313.）」第二の方法（上向法）⁽⁶⁾の重要性を指摘する。勿論、現実の資本主義経済の分析のための基礎理論（原理論）は、純粋な資本主義社会の経済における最も抽象的で一般的なそして最も単純な要素の考察から出発し、順次、複雑なそして具体的な概念を説明し、やがて、純粋な資本主義社会の経済的全体像を多くの概念の複雑な有機的統一体として論理整合的に説明する経済学の方法によって形成されなければならない。⁽⁷⁾産業資本の資本主義的生産過程を分析するには、まず以て純粋な資本主義経済における商品の流通過程と資本の流通過程において労働生産物の商品形態・貨幣形態・資本形態の基本性質を明確にしておく必要がある、という本稿の主張は、マルクスの所謂経済学の方法としての第二の方法に依ることを主張するものである。

本稿が「2. 資本論における価値の説明」で指摘したように、マルクスは、「資本論」の「第一部 資本主義的生産の發展 第一篇 商品と貨幣 第一章 商品」の「第一節 商品の二つの要因」において、商品の二要因が商品の使用価値と商品の価値であることを説明し、商品の価値を創造する実体が人間の労働であること、商品の価値量が労働時間によって測定されること、を明らかにしている。そして、続いて、「第二節 商品によって表される労働の二重性格」において、マルクスは具体的有

用労働が商品の使用価値を生産し、抽象的人間労働が商品の価値を形成する、ことを明らかにする。宇野は、この二つの節がマルクスの労働価値論をなすとしているのであるが、次のように言う。「『商品』論の冒頭に『価値実体』を解明しようとする方法は、第三節で展開される、マルクスによって初めて確立された『価値形態』論に、いな、第一章を『商品』論とした彼の方法自身にも相応するものとはいえないのである。(宇野弘蔵 経済学大系 1 経済学方法論 1962年 東京大学出版会 p. 169. IV「資本論」における方法上の諸問題 一、価値論の論証について)」

こうして宇野は、本来、産業資本の資本主義的生産過程で行なうべき商品化された労働力の生産的消費の分析を、マルクスが、資本論第一部冒頭の第一篇第一章の第一・二節においてすでに行なっていることについての論理的誤謬を、厳しく指摘するのである。このマルクスの論理的誤謬についての宇野の批判とこの論理的誤謬を是正した宇野自身の論理展開の方法は上述の宇野の引用文に対する彼自身の「註」において、以下のように極めて明確である。「マルクスにとっては、労働生産物の商品形態は、貨幣形態、資本形態とともに、ブルジョア的生産様式を『歴史的に特徴づける』ものとして、そしてまたこの生産様式の『最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態』として、『資本論』の体系の発端をなすものとしてよいのである。いいかえれば商品論は、単に労働生産物が商品として交換せられるというだけの事で論ぜられているわけではない。商品・貨幣・資本の形態的發展を基礎にして、生産過程自身が資本によって把握せられるという——そしてそこでその実体を明らかにされる——価値の形態規定を与えるためである。むしろここで直ちに労働価値説を展開するということは、マルクスによって始めて確立された形態論のこの歴史的観点を、古典経済学の『欠陥』の中に埋没せしめる危険をさえ免れないものといってよい。(宇野弘蔵 *ibid.*, p. 170.)」

このように、宇野は彼の「経済学方法論」において、労働生産物の商品形態とその発展形態としての貨幣形態および資本形態についての形態論を如何なる論理次元で展開すべきかという彼自身の従来の主張を簡潔にまとめている。本稿の論理展開の次元についての考察は、マルクスの所謂経済学の方法における第二の方法に従って、宇野のこの主張を具体

化することにもなるのである。

4. 簡単な価値形態

純粋な資本主義社会の経済的要素として最も抽象的且つ基礎的で最も単純な要素は商品である。そして、その商品の価値の表現形態が本稿の考察対象である。言うまでもなく、かかる商品価値の表現形態は貨幣形態である。したがって、商品の価値表現についての考察はこの貨幣形態を対象とすべきである。しかし、この貨幣形態は、本来、商品価値の最も単純な基本的な表現形態を論理的に最も高度に発展させた理論的概念である。しかも、この発展の過程は貨幣の発生メカニズムをも、同時に含むものであり、貨幣形態の考察には、商品の価値形態の弁証法的発展の論理と共に貨幣の発生論理が必要である。したがって、貨幣形態の考察は、まず、商品の最も単純な基本的な価値形態の分析から出発し、次第に発展した価値形態へ分析を進めていき、最後に、かかる分析結果に基づいて最も発展した価値形態である貨幣形態を考察するという手続きが必要である。

(1) 簡単な価値形態における価値表現の仕組

商品の価値表現の最も単純な基本的な形態を簡単な価値形態と呼ぶことにする。簡単な価値形態における商品の価値表現の仕組は以下の如くである。

- ① 労働生産物Aの或る一人の所有者が、自分の生活に必要な労働生産物Aの他に余剰の労働生産物Aを所有しているとする。
- ② この時、彼の生活に必要な労働生産物Aは、彼にとって有用な労働生産物であるが、労働生産物Aのなかで彼の生活にとって余剰な部分は、彼には有用でない労働生産物である。
- ③ いま、労働生産物Aの所有者は、自分の生活に緊急にしかも不可欠に労働生産物Bの y 量を必要としている⁽ⁱⁱ⁾とする。そこで彼は、自分には有用でない労働生産物Aの余剰部分のなかからその x 量を労働生産物Bの所有者に提供し、それとの交換に y 量の労働生産物Bを獲得しよう、と考える。

小幡道昭は「価値論の展開」において「価値形態の展開の出発点における商品所有者の欲求は、端的にはなによりもある種類の商品を特定の量だけ求めるという明確な指向性と定量性によって特徴づけられるものであり、その点で、目に触れるさまざまな商品に対して商品所有者が漠然と感じとる欲望一般の如きものとははっきり区別して捉えうるものである。(小幡道昭, *ibid.*, p. 45)」⁽¹²⁾という。確かに、価値形態の展開の出発点における商品所有者の欲求は、或る特定種類の商品を特定数量だけ求めるという明確な指向性と定量性によって特徴づけられねばならぬが、それとともに、とにかく必ず何時か必要になるというような不特定時点における必要性ではなく、いま必要としているという時間的緊急性によっても特徴付けられねばならない。この事は、後述のように、等価形態にある商品に対する交換動機が価値形態の発展によって分化するために、消費対象の商品を獲得するための交換手段の効率性を考察する必要が生ずる時、重要な意味を持つ事になる。

④ ③の時点で、労働生産物Aの所有者は、彼にとって有用でない余剰の労働生産物Aのx量が労働生産物Bの所有者にとっては緊急且つ不可欠な生活必需品である、と想定している。

労働生産物Aの余剰なx量は、有用性におけるこのような質的対称性をもつことによって、商品に転化する。この商品Aのx量の使用価値は、マルクスのいう「他人のための使用価値」⁽¹³⁾ 或いはその発展としての「社会的な使用価値」であり、労働生産物Aの商品への転化によって、すべての人々に対する労働生産物Aの特定の具体的な有用性が質的に変化したものである。ところで、商品のこのような「他人のための使用価値」⁽¹⁴⁾ はマルクスが資本論で指摘しているように商品の価値を担う素材である。したがって、労働生産物Aのx量が商品Aのx量に転化し、その使用価値を自らの性質とするようになると、商品Aのx量はその使用価値を素材にして商品Aのx量の価値をも自らの性質とするようになる。かくして、商品に転化した労働生産物Aのx量はその商品に特有な「使用価値と価値」とを自らの二つの基本性質とすることになる。

ところで、商品Aの所有者は労働生産物Bのy量についても、それが自分自身には緊急且つ不可欠な生活必需品であるが労働生産物Bの所有者にとっては有用ではない、という有用性における質的対称性があると

商品の価値

認識している。したがって、商品Aのx量の所有者は、労働生産物Bのy量もまたその所有者によって商品に転化されており、その商品に特有な「使用価値と価値」とをその二つの基本性質としている、と認識している。

⑤ ④で説明したように、労働生産物Aの所有者が、商品Bのy量の取得のためにそのx量を商品Bの所有者に提供することを意図する時、労働生産物Aのx量は商品に転化し、商品の価値を自らの性質として持つようになる。したがって、商品Aのx量の価値は、その所有者が商品Aのx量を商品Bのy量と交換するという交換関係を想定することによって、初めて、成立するのであり、商品Aは、自らの交換対象でもありまた商品Aの所有者にとっては緊急で不可欠な生活必需品でもある商品Bのy量を自らの価値の表現材料とすることになるのである。

⑥ 商品Aのx量の所有者が、商品Aのx量の価値を商品Bのy量によって表現する時、商品価値の表現形態における最も単純で基本的な形態すなわち簡単な価値形態が展開される。

⑦ 労働生産物Bのy量が、労働生産物Bの所有者によって、商品に転化される時、商品Bのy量は商品Aのx量の簡単な価値形態とは別に自らにとって独自の簡単な価値形態を展開をすることになる。しかし、⑥の場合では、商品Bのy量は、単に、商品Aのx量の価値表現の表現材料であるに過ぎない。

⑧ 商品Aのx量が商品Bのy量を表現材料とした簡単な価値形態を、次のように表記することにする。

x量の商品A → y量の商品B

既に説明したように、このy量の商品Bは、彼の現在の生活に緊急で不可欠な生活必需品である。そして、この商品Aのx量の簡単な価値形態は、商品Aの所有者の意識のなかに想定されているものである。

いま、商品Aが綿布であり、x量はその10mであり、また商品Bが茶であり、y量はその2kgであるとすれば、商品化された綿布10mの価値形態は次のように書き表わされる。

綿布10m → 茶 2 kg

- ⑨ 商品の価値形態において、→ の左側に位置する x 量の商品 A は、自らの商品価値を → の右側に位置する y 量の商品 B の自然形態⁽¹⁵⁾によって相対的価値として表現し、 y 量の商品 B は x 量の商品 A の価値の等価物⁽¹⁶⁾として機能している。かくして、商品の価値形態では、 x 量の商品 A は相対的価値形態に在り、 y 量の商品 B は等価形態に在る。
- ⑩ 簡単な価値形態で、相対的価値形態にある商品 A x 量が等価形態にある商品 B y 量によって表現している自らの商品価値は、商品 A の所有者がその x 量を商品 B の所有者に提供すれば彼は商品 B の y 量を獲得し得るという商品 A x 量の商品 B y 量に対する獲得可能性或いは獲得能力である。③で前提しているように、商品 B の y 量が、商品 A の所有者の生活にとって、緊急且つ不可欠な生活必需品であることを認識すれば、商品 A x 量が商品 B y 量の獲得能力或いは獲得可能性を持つということは、商品 A の所有者にとって、商品 A の x 量が極めて重要な意義をもつことを意味する。すなわち、商品 A の x 量が価値を持つのである。
- ⑪ 簡単な価値形態における二つの商品の交換比率は次の二つの要因 ((1), (2)) によって変化する。相対的価値形態に在る商品の提供数量は、(1)相対的価値形態に在る商品の所有者が等価形態に在る商品を緊急で不可欠に必要とする程、多く、(2)相対的価値形態に在る商品の生産が困難である程、少なくなる。商品生産の困難性は、結局、その商品の生産に投入される労働量によって表現される。即ち、相対的価値形態に在る商品の生産に直接投入すべき労働量が大い程、さらに、その商品の生産のために消費される生産手段の生産に投入すべき間接的な労働量が大い程、その商品の生産は困難になる。
- ⑫ 簡単な価値形態において相対的価値形態にある商品が等価形態にある商品との商品交換を実現し得るとすれば、その実現の決定権は等価形態にある商品の所有者に在る。したがって、簡単な価値形態において、相対的価値形態に位置する商品が等価形態に位置する商品によって表現する商品の価値は、相対的価値形態に在る商品の所有者が主観的で一方的に描く観念のなかに成立する経済的概念に過ぎないのである。

(2) 簡単な価値形態における価値表現の発展の論理

以下では、簡単な価値形態の発展の必然性を前記の具体例を対象にして考察することにする。

綿布10m → 茶2kg における商品である綿布10mが、現実商品としての茶2kgと交換されるには、「(1) 簡単な価値形態における価値表現の仕組」の⑫に因って、商品化された茶の所有者が、その2kgを綿布10mと交換することに同意しなければならない。茶の所有者がかかる商品交換に同意するには、茶の所有者にとっても、その時、綿布が緊急で不可欠な生活必需品でなければならない。したがって、商品である茶も、同時に 茶 a kg → 綿布 b m という価値表現を行わなければならない。そして、綿布10mの価値実現の決定権を茶2kgが持つように、綿布 b m もまた茶 a kgの価値実現の決定権を待たなければならない。その時、綿布と茶との間の交換数量について綿布の所有者と茶の所有者が合意し得る何らかの調整を行い、この二つの商品の交換が実現されることになる。両者にとって、茶或いは綿布は其々の緊急で不可欠な生活必需品であるから、交換数量の調整は、二人の商品所有者にとって本意ではあっても、必ず成立する。かくして、綿布10mに注目すれば、それは自分自身の価値を茶 α (=或いは $\neq 2$) kgの獲得能力或いは獲得可能性として実現することになる。

ところで、綿布の所有者にとって茶の或る特定数量が緊急で不可欠な生活必需品である時、丁度、茶の所有者にとってもまた綿布の或る特定数量が彼の生活に緊急で不可欠な生活必需品であるということは、極めて偶然である。茶の所有者は綿布以外の特定数量の商品を緊急且つ不可欠な生活必需品として求めているということが一般的に在り得ることである。

綿布の所有者は茶の所有者との接触などで茶の所有者が緊急且つ不可欠な生活必需品として綿布以外の商品の特定数量例えば上衣1着を求めていることを知れば、彼は彼にとっての緊急且つ不可欠な生活必需品である茶2kgを入手するために、茶の所有者が、いま、茶との交換で入手しようとしている上衣1着を或る数量の綿布との交換で、先回りして獲得しておこうとする。綿布の所有者が上衣1着を所有していれば、彼はその上衣1着を茶の所有者に提供することによって、茶の或る数量を獲

得ることが出来るからである。こうして、綿布の所有者は茶 2 kgを綿布10mの等価形態とする簡単な価値形態と茶の所有者が交換で取得しようとしている上衣 1 着を綿布cmの等価形態とする簡単な価値形態とを、同時に彼の意識の中に描くことになる。

小幡道昭は既述の「価値論の展開」において、既に、この論理を明らかにし、次のように言う。「単純な価値形態と拡大された価値形態を区別し両者の差異をはっきりさせるためには——略——あくまで端緒の価値形態に内在する論理で次の形態へ移行する必要があるのである。——改行——では、この内的な移行の契機はどこに潜んでいるのか。それが商品関係の外部に求められるべきでないとするれば、残されている途は商品所有者の間に取り結ばれる相互関係以外にはない。——略——この関係は、たとえば リンネル20エレ= 1 着の上衣 という形態で、上衣との交換を求めているリンネル所有者に即してみれば、交換相手たる上衣所有者の欲求のあり方が、リンネル所有者の欲求の実現にとっても重要な役割を果たしうることからしてすぐに推察できよう。リンネル所有者が一方的に交換を求めるこの直接的形態に固執する限り、上衣所有者の側が同時にリンネル所有者のリンネルをたまたま欲しいと望んでいたという場合を除けば、両者の間に交渉の始まる余地はない。こうしたなかで、上衣所有者との交渉の機会を擱もうとすれば、リンネル所有者にとっては相手がそのとき欲しいと思っている当の商品を、先回りして手に入れるほかないわけである。もし上衣所有者のある者が、上衣 1 着=10ポンドの茶という形態で交換を求めているとすれば、われわれのリンネル所有者にとっては10ポンドの茶もまた新たな交換の対象に繰り入れられることになろう。(小幡道昭 op.cit., p. 48-49)」

茶の所有者が緊急で不可欠な生活必需品として綿布以外の商品例えば上衣 1 着を求めている時、上衣の所有者もまた綿布以外の商品例えば金 0.1 $\frac{2}{3}$ を彼の緊急で不可欠な生活必需品として求めているとしよう。この時、綿布の所有者は、上衣 1 着を先回りして綿布の或る数量との交換で獲得しようとするように、上衣の所有者が、いま、或る数量の上衣との交換で入手しようとしている金0.1 $\frac{2}{3}$ を綿布の或る数量との交換で更に先回りして獲得しておこうとする。こうして、綿布の所有者は上衣の所有者が交換で入手しようとしている金0.1 $\frac{2}{3}$ を或る数量の綿布の等価形態と

する第三の新しい簡単な価値形態を彼の意識のなかに描くことになる。

綿布の所有者が彼の意識のなかに新しい簡単な価値形態を描き加えていく作業は、特定数量の綿布が緊急で不可欠な生活必需品なので、その綿布を自分が所有する或る数量の商品との交換で入手しようとする商品所有者が現われるまで続くことになる。

勿論、商品である茶の所有者が複数である場合もある。そして、これらの複数の茶の所有者の多くにとって、綿布以外の様々な商品が緊急で不可欠な生活必需品である時、綿布の所有者は、特定数量の綿布を緊急で不可欠な生活必需品とする茶の所有者を求めて、次々と、茶の所有者との接触を繰り返しながら、綿布10m → 茶2kg という簡単な価値形態を彼の意識のなかに描き続けていくことになる。やがて遂に、或る数量の綿布を緊急で不可欠な生活必需品とする茶の所有者に巡り合う場合もある。これは商品としての茶の所有者が複数である時の第一の場合である。この場合には、綿布の所有者が意識に描く簡単な価値形態は、最初から最後まで、綿布10m → 茶2kg である。この簡単な価値形態は、綿布の所有者に固定的に繰り返意識され続けられ、他の新しい簡単な価値形態が生みだされて発展することはない。

綿布の所有者が、或る数量の綿布を緊急で不可欠な生活必需品とする茶の所有者に遂に巡り合えない場合もある。この場合には綿布の所有者は、遂に、多くの茶の所有者にとって緊急で不可欠な生活必需品である綿布以外の様々な商品のどれか一つの特定数量を或る数量の綿布と交換し、その商品を先回りして、入手しておこうとする。これは商品としての茶の所有者が複数である時の第二の場合である。この場合には、先に考察した茶の所有者が上衣1着を緊急で不可欠な生活必需品としている場合と同じ状態が成立する。綿布の所有者の意識のなかに、或る数量の綿布の商品価値を表現する簡単な価値形態が、次々に、描き加えられていくのである。

小幡道昭は前述の「価値論の展開」で「リンネル所有者（本稿では余剰の綿布の所有者——杉上）は上衣所有者（本稿では茶の所有者——杉上）の観点をかりて視野を拡大し、そこからさらに茶の所有者（本稿では上衣の所有者——杉上）の観点に移乗するというかたちで、自己の周辺の商品集聚を探索し、いわばリンネル所有者（本稿では綿布所有者——杉

上)の利害に密着した欲求の網の目を手繰りだすのだと考えることもできる。しかも、このような探索は単に単線的に先へ先へと進められるばかりではない。むしろ、上衣の所有者(本稿では茶の所有者——杉上)が複数存在し、その各々が異なった欲求を抱いている以上、すでにこの最初の局面において商品たるリンネル(本稿では綿布——杉上)はすでに夥しい数の他の交換を求める形態と連結することになる。(小幡道昭 *ibid.*, p. 49)」という。

確かに「このような探索は——略——単線的に先へ先へと進められる」。しかし、茶の所有者が複数存在するときに、簡単な価値形態の相対的価値形態にある綿布が「夥しい数の他の交換を求める形態と連結することになる」のは、商品としての茶の所有者が複数である時の第二の場合のみである。

こうして、商品所有者が自分自身では所有していない商品に対する彼の緊急且つ不可欠な生活必需品としての必要性が簡単な価値形態を發展させる原動力なのである。「その点で、目に触れるさまざまな商品に対して商品所有者が漠然と感じ取る欲望一般の如きものとははっきり区別して捉えうるものである。(小幡道昭 *ibid.*, p. 45)」という小幡道昭の視点は、論理の展開において、きわめて重要な要諦となる。

5. 簡単な価値形態の過渡的發展形態

(1) 拡大された価値形態の表記

簡単な価値形態の直接の發展形態は拡大された価値形態である。拡大された価値形態は、次のように表記される。

綿布 10m	→	茶	2 kg
綿布 20m	→	上衣	1 着
綿布 30m	→	金	0.1 $\frac{1}{2}$ g
綿布 x m	→	A 商品	y 量

(2) 商品所有者の交換動機の分化

簡単な価値形態では、相対的価値形態に在る商品の所有者が自己の所有する商品を等価形態に在る商品と交換しようとするのは、等価形態に在る商品が彼にとって緊急で不可欠な生活必需品であるからである。したがって、簡単な価値形態を成立させる交換動機は等価形態に在る商品に対する緊急の直接消費の必要性である。

ところが、拡大された価値形態では、この簡単な価値形態における交換動機は、それ自身の他にそれ自身の実現を目的とする交換動機を派生させ、二つに分化する。すなわち、相対的価値形態に在る綿布の所有者の茶 2 kg に対する交換動機は緊急の直接消費の必要性であるが、上衣 1 着、金 0.1 匁など、等価形態に在る茶 2 kg 以外の商品に対する交換動機はすべて茶との交換手段を取得するということである。緊急の直接消費の必要性という交換動機に対して、この緊急の直接消費の対象との交換手段の取得という交換動機は質的にまったく異なる新しい交換動機である。この交換動機の質的分化は、既に、小幡道昭が「価値論の展開」において明らかにしているものである。小幡は次のようにいう。「こうしてリンネルの所有主体（本稿では綿布の所有者——杉上）は要求の網の目に現われる相手に次々に転位するかたちで、自己の周辺の商品集聚に視野を伸ばしてゆくことになる。このなかに、単純な価値形態とは異なる新たな機能形態の萌芽も発見されることになる。と同時に、そこでは単純な価値形態を支える直接的な欲求が単に弱められて相対的に拡大するというのではなく、むしろそれとははっきり区別できる新たな交換動機の方節化が観察されるのである。——略——先のリンネル所有者（本稿では綿布の所有者——杉上）に即していえば、もともと茶（本稿では上衣——杉上）の使用価値に対しては些かも欲求を感じていなかったにもかかわらず、ここでは 1 着の上衣（本稿では茶 2 kg——杉上）を取得する媒介手段として 10 ポンドの茶（本稿では上衣 1 着——杉上）と交換を求めようになる。（小幡道昭 *ibid.*, pp. 49-50）」

拡大された価値形態は、相対的価値形態に在る商品の所有者の等価形態に在る商品に対する質的に分化された交換動機を付記すれば、次のように表記される。

綿布 10m → 茶 2kg ----- 緊急の直接消費の必要性

綿布 20m	→	上衣 1着	-----) (緊急の直接消費の対象との 交換手段の取得
綿布 30m	→	金 0.1%	-----	
綿布 x m	→	A商品 y量	-----	

ここで、相対的価値形態に在る綿糸が緊急の直接的消費の必要性のために、等価形態に在る茶に対して提供される数量は、既に、「4. 簡単な価値形態 (1)の①」で説明したように、簡単な価値形態における二つの商品の交換数量を規定する二要因によって変化する。相対的価値形態に在る綿糸が等価形態に置かれる交換手段としての諸商品に対して提供される数量もまた、交換手段の取得が緊急の直接的消費の対象商品を取得するためであることを反映して、この同じ二要因によって変化する。

(3) 拡大された価値形態の発展

様々な労働生産物の余剰生産物の或る数量がその所有者達によって、緊急で不可欠な彼らの生活必需品を獲得するために商品化される時、かかる諸商品の所有者達は、各自の意識のなかに各々独自の拡大された価値形態を描くことになる。例えば次の如くである(多くの商品所有者のなかからランダムに綿布・帽子・石炭・小麦・鉄の商品所有者達を取出し、彼らがそれぞれの意識のなかに描く拡大された価値形態は次の如くであるとす)。

綿布 10m	→	茶 2 kg	-----	緊急の直接消費の必要性
綿布 20m	→	上衣 1着	-----) (茶 2 kgとの)交換手段の取得
綿布 30m	→	金 0.1%	-----	
綿布 x m	→	A商品 y量	-----	

帽子 1個	→	シャツ 3着	-----	緊急の直接消費の必要性
帽子 3個	→	金 1%	-----) (シャツ 3着との)交換手段の 取得
帽子 2個	→	砂糖 5 kg	-----	
帽子 w個	→	B商品 v量	-----	

石炭 0.5%	→	塩 15kg	-----	緊急の直接消費の必要性
---------	---	--------	-------	-------------

商品の価値

石炭 1 トン	→	胡椒 5 kg	-----	(塩15kgとの)交換手段の取得
石炭 1.5 トン	→	金 0.5 両		
石炭 u トン	→	C 商品 t 量		
小麦 5 kg	→	毛糸 3 kg	-----	緊急の直接消費の必要性
小麦 6 kg	→	葡萄酒 2 瓶	-----	(毛糸3kgとの)交換手段の取得
小麦 10kg	→	胡椒 1 kg		
小麦 s kg	→	D 商品 r 量		
鉄 0.5 トン	→	豚肉 15kg	-----	緊急の直接消費の必要性
鉄 0.8 トン	→	石鹼 12個	-----	(豚肉15kgとの)交換手段の取得
鉄 1 トン	→	胡椒 8 kg		
鉄 p トン	→	E 商品 q 量		

諸商品の所有者達が、それぞれの拡大された価値形態にしたがって、自分の生活に緊急で不可欠な生活必需品を獲得しようとする時、その生活必需品と、直接交換できる直接的交換手段を取得するのに、その他の媒介的な交換手段の取得を何度も、間接的に繰り返さねばならぬほど、彼らは緊急で不可欠な生活必需品の獲得に多くの時間を浪費し、緊急な必要を満たし得ぬことになる。例えば、商品としての綿布の所有者が急いで茶 2 kg を消費しなければならぬ時に綿布との交換で、直接的交換手段である上衣を手に入れるのに、媒介的交換手段である金を手に入れ、次に他の何かを手に入れ、更に他の……等など、ということをし、繰り返さなければならぬほど、急ぎの必要を満たし得ないことになる。

商品化される労働生産物の所有者達はこういう経験を繰り返すうちに、やがて、彼らはさまざまな直接的・媒介的な多くの交換手段のなかに、各自の緊急で不可欠な生活必需品との交換手段として効率的に機能する商品が存在することに気付く。このような効率的な交換手段としての商品は、比較的多数の商品所有者達に共通する緊急で不可欠な生活必需品である。かかる生活必需品は、その生活必需品を求める多くの商品所有者達が描く簡単な価値形態に共通する等価形態に在るので、彼らの諸商品との交換成立の決定権を握ることができ、効率的な交換手段となるこ

とが出来る。

商品化される労働生産物の所有者達は、かかる生活必需品が各自の生活必需品を獲得するために効率的な交換手段であることに気付くと、やがて、この生活必需品を、緊急の直接消費の必要性から獲得するだけでなく、何時でも直ちに、緊急で不可欠な他の様々な生活必需品を獲得するための単なる効率的な交換手段として取得しておくようになる。もし、この生活必需品を緊急にそして直接に消費しなければならぬ時には、この直接消費による減少分を自己の商品との交換によって、再び、補っておこうとする。

生活習慣・風俗伝統などの社会環境および自然環境を同じくする人々のなかの多くの人々は或る種の労働生産物が、同じように、緊急で不可欠な生活必需品であると共感する状態にある。したがって、効率的な交換手段は、余剰生産物の商品化の発展過程で、いわばこれらの社会環境および自然環境の共通性を基礎に、自然発生的に、成立してきたものである。したがって、効率的な交換手段は、一つの社会の中で人々が生活習慣・風俗伝統などいわば社会環境および自然環境を異にするにつれて、異ならざるをえない。それゆえ、効率的な交換手段は一つの社会では極めて少数ではあるが、複数であるとしなければならない。

先に示した具体例では、金と胡椒が効率的な交換手段であると仮定されている。綿布の所有者は彼の拡大された価値形態の認識から上衣の所有者にとって金が彼の緊急で不可欠な生活必需品であることを発見するが、同様に帽子の所有者はシャツの所有者にとって金が、また石炭の所有者は胡椒の所有者にとって共に金が共通する緊急で不可欠な生活必需品であることを発見する。こうして、綿布・帽子・石炭の所有者達は金が上衣・シャツ・胡椒の所有者達の共通する緊急で不可欠な生活必需品であることを発見する。また、石炭・小麦・鉄の所有者達は胡椒が塩・葡萄酒・石鹼の所有者達にとって共通する緊急で不可欠な生活必需品であることを発見している。したがってこの具体例では、商品金は上衣やシャツや胡椒の所有者達に共通する緊急で不可欠な生活必需品であることによって、また商品胡椒は塩や葡萄酒や石鹼の所有者達に共通する緊急で不可欠な生活必需品であることによって社会の効率的な交換手段になることが出来る。

商品の価値

こうして社会的に効率的な交換手段が成立するようになると、商品所有者達は、自らが所有しない或る商品の特定数量を緊急に消費しなければならないという必要が生じた場合、彼らは、まず自己の所有する労働生産物の余剰部分の或る数量をこの効率的な交換手段である商品の或る数量と交換し、次に、この効率的な交換手段である商品の一定数量との交換で、彼の緊急に不可欠な生活必需品の少なくとも必要数量以上を獲得するようになる。多数の商品所有者達がこのような二つの商品交換によって自らの緊急で不可欠な生活必需品を獲得するようになると、多くの商品所有者達は、まず、自己の商品化すべき余剰労働生産物を相対的価値形態に置き、その等価形態に社会的に効率的な交換手段である商品を置くという簡単な価値形態を、彼らの意識のなかに描きだす。其処には、人々の所有する様々な労働生産物の余剰な或る数量を商品として相対的価値形態に置き、社会的に効率的な交換手段である商品を共通の等価形態に置く簡単な価値形態が多数併存する状態が出現する。すなわち前記の具体例では次の如くである。

綿布	30m	→	金	0.1 $\frac{2}{5}$ ラ	----- 効率的な交換手段(商品金) の取得
帽子	3個	→	金	1 $\frac{2}{5}$ ラ	
石炭	1.5ト	→	金	0.5 $\frac{2}{5}$ ラ	
石炭	1ト	→	胡椒	5kg	----- 効率的な交換手段(商品胡椒) の取得
小麦	10kg	→	胡椒	1kg	
鉄	1ト	→	胡椒	8kg	

商品のこの価値形態が一般的価値形態の具体例である。

(4) 一般的価値形態の表記

社会的に効率的な少数の交換手段の併存状態において成立する一般的価値形態は次のように表記される。

綿布	30m	→	金	0.1 $\frac{2}{5}$ ラ
帽子	3個	→	金	1 $\frac{2}{5}$ ラ

石炭 1.5ト_ン → 金 0.5 $\frac{2}{3}$ ラ_ブ

A商品 x量 → 金 y $\frac{2}{3}$ ラ_ブ

石炭 1ト_ン → 胡椒 5 kg

小麦 10kg → 胡椒 1 kg

鉄 1ト_ン → 胡椒 8 kg

B商品 u量 → 胡椒 v kg

ここで、金と胡椒とは簡単な価値形態の別々なグループでそれぞれ共通する等価形態に在る商品である。これらの商品は商品交換の発展が社会的に効率的な諸商品との交換手段として商品世界から抽出した一般的等価物⁽¹⁹⁾である。

一般的等価形態において、相対的価値形態に在る諸商品の商品所有者は緊急で不可欠な生活必需品を獲得するために一般的等価物である金或いは胡椒を取得する。この場合、相対的価値形態に在る商品が一般的等価物と交換される数量は、簡単な価値形態における二つの商品の交換数量を規定する二要因と、相対的価値形態に在る商品についての社会的・自然的環境を共通にする社会における需給関係とによって変化する。

(5) 一般的等価物の商品特性

一般的等価物は、商品として、社会的需要及び自然的属性において、次のごとき特性を備えている。

①社会的需要における特性；比較的多くの商品所有者達によって、共通してしばしば、緊急に不可欠な生活必需品として直接消費されるという特性⁽²⁰⁾。

既に考察したように、一般的等価物の成立の必然性から一般的等価物がかかる商品特性を必要とすることは明らかである。

②自然的属性における特性；商品の一つ一つが質的に無差別であるという特性、或いは一つの商品が自由に分割でき、しかも各部分が均質であるという特性⁽²¹⁾。

多くの簡単な価値形態において相対的価値形態に在る様々な商品の所有者達は、一般的等価物がつねに様々な必要な数量で等価形態に位置する

ことを要求する。商品所有者のかかる要求は、一般的等価物に転化し得る商品をかかる自然的属性を有する商品に限定する。

(6) 一般的価値形態の発展

既述のように、一般的価値形態ではごく少数ではあるが複数の一般的等価物が存在している。この複数の一般的等価物が社会的に唯一の一般的等価物に絞られるには商品経済の質的に画期的な発展が必要である。すなわち、社会の部分的な経済システムにすぎない商品経済から社会の全面的経済システムとしての商品経済への発展が必要である。商品経済の前者の状態では生産者はその生産物の中から自らの生活に必要な余剰部分のみを商品化しているに過ぎないが、後者の状態では人間のすべての労働生産物のみならず人間の労働能力までが商品化される状態にある。この状態の商品経済が言うまでもなく資本主義経済である。純粋な資本主義経済では、一方では無産の労働者達が彼らの労働能力を商品として販売し、その販売代金で家族の生活必需品を購入し、それを消費して人間としての生活を営む。他方では産業資本家が商品化された労働力と商品化された生産手段を購入して利潤の獲得を目的とする資本主義的生産過程を展開する。この資本主義的生産過程の展開によって資本主義社会の拡大再生産が維持されるのである。

純粋な資本主義社会の経済活動では、一般的等価物は次のような二つの必要性を満たし得なければならない。必要性の一つは次のごときものである。産業資本は、資本主義的生産過程に必要な生産手段と人間の労働能力を、一般的等価物との交換によって、必要な時に直ちに獲得出来なければならない。一般的等価物がかかる商品交換を極めて迅速に行い得るものでなければならない。必要性の他の一つは次のごときものである。純粋な資本主義社会では、労働者階級は無産階級であり、貯蓄を保有しない。したがって労働者は、家族の生活資料を、日々、一般的等価物との商品交換によって獲得しなければならない。一般的等価物がかかる商品交換をも極めて迅速に可能にするものでなければならぬ。

これら二つの必要性を満たす一般的等価物は緊急に必要な商品を獲得する交換手段として社会的に極めて効率的に機能しなければならない。一般的等価物がこのように効率的に機能するには、社会のすべての商品

所有者達が、その一般的等価物を社会的に唯一の一般的等価物として取り扱い、すべての簡単な価値形態の等価形態にその一般的等価物を共通に置く、という状態が成立しなければならない。一般的等価物についてのかかる社会的状態は論理展開の必然的結果として成立するものではない。産業資本成立の歴史的⁽²²⁾前提をなす原始的蓄積が国家権力を利用せざるを得なかったように、かかる一般的等価物についての社会的状態は、資本主義社会がその資本主義経済を確立する必要から国家の法によって制度的に創りだしたものである。前述のように、資本主義国家が資本主義経済を確立するためには、一般的等価物の全社会的な高度な効率的機能を必要とする。したがって、資本主義国家は社会の少数の一般的等価物のなかから唯一の商品を唯一の社会の一般的等価物として社会的に公認する必要がある。そして、かかる社会的公認は、資本主義社会における金本位制度の確立に際して国家が金貨を本位貨幣として法定することによってなされるのである。かくして、商品金を社会の一般的等価物とするという社会的公認は資本主義社会がその確立のために行なわねばならなかった歴史的所産である。しかし、金本位制度確立の具体的考察は現実の資本主義経済を分析する基礎理論（原理論）の対象ではない。本稿では、その具体的考察は捨象される。商品金が社会の一般的等価物として社会的に公認されていることを前提すればよい。その前提のもとで理論的分析が進められる。商品金がすべての簡単な価値形態において唯一の社会の一般的等価物である時、貨幣形態が成立する。

6. 貨幣形態

(1) 貨幣形態の表記

既述のように、商品金が社会の唯一の一般的等価物として社会的に公認されるようになると、商品金はすべての簡単な価値形態の等価形態に位置し、緊急に必要な商品を獲得する交換手段として社会的に極めて効率的に機能する。このような状態では、人々は商品金を接続する次の二つの行動のために所有する。すなわち、人々は自己の所有する商品をまず社会の一般的等価物である商品金と交換して置き（第一の行動）、自分が所有していない或る商品の特定数量を緊急に必要な時、その商品

商品の価値

金の或る数量をすべての商品との交換手段として用いてその必要な商品を獲得する(第二の行動)。人々が自己の所有する商品をまず一般的等価物である商品金と交換して置くという第一の行動をとる時、人々の重要な関心は自己の商品が1数量単位当りで一般的等価物である商品金のどれだけの数量と交換されるか(即ち、自己の所有する商品の1数量単位がすべての商品との交換手段たる金のどれだけの数量を獲得するか)ということである。したがって、人々は自己の商品の1数量単位が出来るだけ沢山の一般的等価物である商品金を獲得することを期待しながら、自分の意識のなかに、自己の所有する商品の1数量単位についての簡単な価値形態を次のように描く。

A商品1数量単位 → 金 $x \frac{mg}{g}$

こうして、完成された価値形態としての貨幣形態が成立する。貨幣形態は社会のすべての商品と社会の唯一の一般的等価物すなわち商品金とによって、例えば次のように表記される。

綿布	1 m	→	金	3 mg
上衣	1 着	→	金	333mg
石炭	1 トン	→	金	300mg
小麦	1 kg	→	金	10mg
鉄	1 トン	→	金	800mg
A商品1単位		→	金	x mg

貨幣形態における一般的等価物である商品金が貨幣である。本来、人間の労働生産物である金とその生産者にとって余剰な生産物として他の余剰な労働生産物と交換される時、その金は他人のための使用価値を自らの性質とするようになり、そのことによって商品の使用価値と商品の価値を二つの基本性質とする商品金に成長した。資本主義国家が商品金を社会の唯一の一般的等価物として社会的に公認する時、商品金はさらに貨幣に成長する。貨幣形態において、相対的価値形態に在る商品1単位数量が表示する獲得可能な特定の貨幣(金)数量は相対的価値形態に

在る商品の価格であり、その商品の価値の表現形態である。

貨幣形態では、すべての商品は、まず、購買手段⁽²³⁾としての貨幣を獲得しておくために販売される。その場合には、相対的価値形態に在る商品の所有者が等価形態に在る商品を緊急で不可欠に必要とする程自己の所有する商品を多く提供するという関係は背後に退いている。そして、個々の商品の社会的需要量に対する社会的供給量の増減がその商品1単位数量の獲得可能な貨幣数量を変化させるという商品の需給関係が表面に現れる。さらに、商品1単位数量が獲得出来得る貨幣数量は商品の生産に必要な直接的且つ間接的投入労働量によっても変化する。

(2) 貨幣としての金の商品特性

貨幣形態は一般的価値形態の一層の発展形態である。したがって、一般的価値形態における一般的等価物が持つ商品特性は、貨幣形態における貨幣においてさらに一層発展する。

一般的価値形態における一般的等価物の社会的需要における特性は比較的多くの商品所有者達が共通してしばしば緊急に不可欠な生活必需品として直接消費するという特性であったが、かかる特性は、貨幣としての金では、今やすべての商品に対する購買手段としてすべての商品所有者が常に自己の商品との交換で獲得しておくという特性に発展している。

一般的価値形態における一般的等価物の自然的属性における特性は商品の一つ一つが質的に無差別であるという特性或いは一つの商品が自由に且つ均質に分割できるという特性であるが、かかる特性は、貨幣としての金の自然的属性における特性として次の三つの特徴を兼ね備えた特性へと、質的に発展している。

- ① 自由で均質な分割が出来るという特性
 - ② 貴重な商品として社会的に評価されるという特性。人々によって貴重な商品として評価される商品は少量で他の大量の商品の価値を表現することができる。
 - ③ 耐久性に勝れ且つ非生活必需品であるという特性
- ①と②の属性は貨幣が通貨として機能するのに必要であり、②と③の属性は貨幣が蓄蔵手段(支払手段としての機能を含む)として機能するのに必要である。

(3) 貨幣形態における商品の価値表現

貨幣形態は完成された商品価値の表現形態である。「(1) 貨幣形態の表記」で触れたように、商品は自らの価値を、商品としての自分自身の1数量単位がどれだけの数量の貨幣を獲得できるかという商品の1数量単位当りの特定数量の貨幣獲得可能性(貨幣獲得能力)として表現している。⁽²⁴⁾この時、1数量単位当りの商品が表示する獲得可能な貨幣の特定数量はその商品のその時の価格である。したがって商品は自らの価値を自分自身の1単位数量の価格が表示する貨幣数量の獲得可能性(獲得能力)として表現する。そして、商品の価格すなわち1数量単位の商品が表示する特定数量の貨幣獲得可能性(貨幣獲得能力)は、その商品についての需給関係が異なることによって、また、種類が異なる商品は生産に投入する労働量を異にすることによって、変化する。

商品所有者は商品の価格が表示する獲得可能な特定数量の貨幣を現実獲得すれば、彼はその貨幣をいつでもすべての商品に対する購買手段として使用することが出来る。前例の貨幣形態では、例えば綿布1mは、自らの商品価値を、貨幣金3mgという価格が示す貨幣金3mgの獲得可能性(獲得能力)として表現している。いま、綿布の所有者が綿布のこの商品価値の表現でN mの綿布を販売することが出来れば、彼は3 Nmgの貨幣(金)を入手する。彼はこの貨幣(金)3 Nmgを、いつでも、如何なる商品に対してもその購買手段として支出できる。

貨幣形態はこのような商品価値の完成された表現機構である。商品価値に特有な表現機構がかかるものであることから、この機構によって表現される商品の価値は、その商品の所有者に商品の価格が表示する特定数量の購買手段である貨幣を獲得せしめる商品の内在的性質であること、しかもその内在的性質は商品の価格水準やその変動を規定するものとして量的に増減し得ることが明らかになる。

7. むすび

或る労働生産物の所有者にとって余剰の労働生産物は商品に転化される。商品は商品の使用価値と商品の価値を二つの基本性質とする人間の

労働生産物の発展形態であり、価値形態を展開する。価値形態の発展は資本主義経済の確立によって貨幣形態に達する。貨幣形態は完成された価値形態であり、資本主義経済に特有な簡単な価値形態である。

貨幣形態において、商品はその価値を商品1数量単位当りが獲得し得る貨幣数量によって表現する。この時、商品1数量単位が表示する獲得可能な貨幣の特定数量が商品の価格である。従って、商品は自らの価値を商品1単位数量の価格が表示する特定数量の貨幣獲得可能性（貨幣獲得能力）として表現する。そして、商品の価格は商品の需給関係によって或いは商品種類によって異なる投入労働量によって変化する。商品所有者が商品価格が表示する特定数量の貨幣を現実に獲得すれば、その貨幣はすべての商品に対する購買手段となる。

商品価値の自らに特有な表現機構がかかるものであることから、商品の価値はその商品の所有者に商品の価格が表示する特定数量の購買手段である貨幣を獲得せしめる商品の内在的性質であること、しかもその内在的性質は商品の価格水準やその変動を規定するものとして量的に増減することが明らかになる。これらが本稿の結論である。

本稿の結論は次の一連の論理展開の出発点である。すなわち、本稿の結論に基づいて、商品価値の測定の論理が解明され、さらに通貨の機能が分析される。そして、通貨の機能の質的發展の分析によって、貨幣の蓄蔵手段としての機能が考察される。この考察によって、貨幣が資本に形態的に発展していく論理が明らかにされ、人間の労働生産物の最高の発展形態である資本の本質が解明される。人間の労働生産物の形態的發展についてのこの一連の分析では、つねに、本稿において明らかされた商品の内在的性質としての商品の価値がその基軸となる。

(1991・11・17)

【注】

- (1) 杉上忠幸, 資本主義経済の第三の発展段階 北星学園大学経済学部・北星論集第27号, 1990年; p. 22., p. 27.
- (2) 江夏美千穂・上杉聡彦, カール・マルクスフランス語版資本論・上巻, 1979年, 法政大学出版局, p. 18.
- (3) 江夏美千穂・上杉聡彦, *ibid.*, 目次による

商品の価値

- (4) マルクスは商品の価値を商品の一要因として把握したように、商品の使用価値をも商品の一要因であると把握している。この商品の使用価値を商品がもつ商品の性質として把握する事ができる。例えば、小林弥六「経済原論 1978年、お茶の水書房」では、「商品の使用価値とは商品の経済的規定性であり、その属性により人々の欲求を満足させるのに役立つ性質と看做すべきであろう。(同書 p. 55.)」、その他例えば、大内 力、大内力経済学体系第二巻経済原論上 流通論・生産論、1981年、東京大学出版会 p. 109., 山口重克、経済原論講義、1985年、東京大学出版会 p. 16.
- (5) 江夏美千穂・上杉聡彦、ibid., 目次による
- (6) 第二の方法はマルクス経済学批判 武田隆夫・遠藤湘吉・大内 力・加藤俊彦訳岩波文庫 1956年 p. 313. では、「第二の道」と訳されている。この第二の道に対して「第一の道は、経済学がその成立の過程で歴史的にとった道である (ibid., p. 312.)」と説明されている。
- (7) 日高 晋、経済原論、1983年、有斐閣選書、p. 10.
- (8) マルクスは資本論で具体的有用労働を単に有用労働という場合がある。江夏美千穂・上杉聡彦、ibid., p. 10. 大内兵衛・細川嘉六 監訳、カール・マルクス資本論第1巻(1)、1968年、大月書店、p. 57.
- (9) 具体的有用労働と同様に、マルクスは資本論で抽象的人間労働を単に人間労働という場合がある。江夏美千穂・上杉聡彦、ibid., p. 13. 大内兵衛・細川嘉六監訳、ibid., p. 60.
- (10) 宇野弘蔵、経済学大系1 経済学方法論、1962年、東京大学出版会、VI「資本論」における方法論上の諸問題 一、価値論の論証について、p. 169.
- (11) 大内 力は、次のようにいう。「価値の量的決定が、等価形態に立つ商品の量がまずきめられ、それに対応した形で行なわれる点を明確にしたのは宇野博士の功績である(大内力経済学大系 第二巻経済原論上、1981年、東京大学出版会、p., 121.)」
- (12) 小幡道昭は価値形態論の出発点の商品所有者の欲望が明確な指向性と定量性をもたぬ場合には、「与えられた予算のもとでさまざまな財がどれだけ得られるかを配慮し、効用の序列を念頭に一挙に総量の交換を敢行する、いわば制約条件下での極大行動のようなものを想定して理論を組み立てる意味もあろう。(小幡道昭、ibid., p. 45.)」という。
- (13) 江夏美千穂・上杉聡彦、op. cit., p. 10.
- (14) 江夏美千穂・上杉聡彦、ibid., p. 4.

- (15) 江夏美千穂・上杉聡彦, *ibid.*, p. 17.
- (16) 江夏美千穂・上杉聡彦, *ibid.*, p. 18.
- (17) 江夏美千穂・上杉聡彦, *ibid.*, p. 19.
- (18) 山口重克は、多くの商品所有者によって共通に等価形態におかれる商品には、「直接の有用性」と「直接交換可能性」との二つの有用性が共存することを指摘する。山口重克, 経済原論講義, 1985年, 東京大学出版会, p. 22-24.
- (19) 江夏美千穂・上杉聡彦, *op. cit.*, p. 40.
- (20) 小幡道昭, *op. cit.*, p. 54-55.
- (21) 小幡道昭, *ibid.*, p. 55.
- (22) 江夏美千穂・上杉聡彦, カール・マルクスフランス語版資本論・下巻, 1979年, 法政大学出版会, p. 447.
- (23) 江夏美千穂・上杉聡彦, *op. cit.*, カール・マルクスフランス語版資本論・上巻, p. 114.
- (24) マルクスは資本論で次のようにいう。「商品は、使用価値としては、ある特殊な必要をみたし、素材的富の特殊な一要素をなしている。ところが、商品の価値は、この富のすべての要素にたいして、その商品がもっている引力の度合を測り、したがって、その商品を所有する者の社会的富を測る。(江夏美千穂・上杉聡彦, *ibid.*, p. 113)」
山口重克は前掲の経済原論講義 p. 35. で、「貨幣との交換力としての商品の価値」、「価値を商品の交換力であると規定するとすれば」といっている。また、山口は、経済理論学会[編], 経済理論学会年報第27集「労働価値説の現代的意義」における掲載論文「価値概念の広義化をめぐる」において、「なお、念のために付言しておけば、個々の商品の交換性ないし交換力をとりあえずその商品の内属性として捉えて価値と規定しておこうというのは、もちろん、従来の狭義の価値の解明が究極の課題としてあるからであって、それがなければこのような概念を設定するのは余計なことかもしれない。(山口重克, *ibid.*, p. 13.)」という。